解答・解説

問一①

**することもなく、退屈である。**

「つれづれなり」は、することがなく手持ちぶさたな様子。「つれづれなる」は連体形で、「まま」を修飾する。

問一②

**一日中。**

「日暮し」は、日が暮れるまでの間、すなわち終日という意味。「毎日」と混同しない。

問一③

**とりとめのないこと。**

「よしなしごと」は、筋道やまとまりのない事柄。心に次々と浮かぶ、雑多な思いを指す。

問二

**すずり**

「硯」は墨をすって墨汁を作る道具。「硯に向かふ」は、文章を書くために硯に向き合うこと。

問三

**シク活用の形容詞「あやし」の連用形「あやしく」が、ウ音便になった形。**

「あやしく」の「く」が「う」に変化して「あやしう」となる。この文では「不思議に」「妙に」の意味。

問四
けれ
文中に係助詞「こそ」があるので、結びの助動詞「けり」を已然形「けれ」にする。

問五
已然形。
「けり」の活用は、けら・○・けり・ける・けれ・○。この文の「けり」は、過去よりも詠嘆の意味で読む。

問六
係り結び。
係助詞「こそ」を受け、文末を已然形「けれ」で結ぶ。「ぞ・なむ・や・か」は連体形、「こそ」は已然形と覚える。

問七
兼好法師（吉田兼好）。
鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて生きた人物。解答は「兼好法師」でも「吉田兼好」でもよい。

問八
鎌倉時代末期。
一般に、鎌倉時代末期ごろに成立したとされる。成立時期と作者が生きた時期を区別して覚える。

問九
随筆。
見聞きしたことや考えたことを、比較的自由に書き記す文章。『枕草子』『方丈記』とともに三大随筆に数えられる。